

四 国会議事堂

東京を訪れる内外の人々に最も印象的な建物は何と云つても国会議事堂である。霞ヶ関の中央の丘上に聳えていて、その中央塔が東京で一番高く、よく目立つ建物であるからでもある。その建築が当時の大蔵省営繕管財局の建築技術の粋を尽し、当時すでに三千万円に上る巨費を投じ、その完成に十六カ年もかかったという豪華な建物であるせいでもある。

それがあらぬか近年、地方より上京される団体旅行者や修学旅行の生徒達が、この議事堂を一つの名所として見物にきて、春や秋の気候のよい時には、国会を四角に取巻く公道が遊覧バスで埋まる時が珍しくない。

私はこの議事堂を仰ぎ見る毎に、またそれを取巻くバスの縦隊をながめる毎に、悲喜交々至るの感懐に堪えられないものがある。

かつて明治政府の威圧の下にその成育を阻まれてきた日本の議会政治が、大正年間に入り漸くその使命の自覚段階に立至り、政党内閣が曲りなりにも誕生することになった。そして日本の民主政治の礎石を永久にこの地に据えるべく、われわれの先輩は、遅しい構想力を發揮して、この新議事堂の建築にとりかかったのである。しかるにこの議事堂の完成をつげた時には既に、政治

の中心は軍部に移り、政党はその圧力の下に窒息を余儀なくされるといふ皮肉な歴史を経験したのである。本来、日本人の骨髄であり、日本の自由の守護神であり、内乱と暗殺の防壁であるべき議会政治が、たちまちにして軍の馬蹄に蹂躪されてしまったのである。

敗戦後アメリカ占領軍の手によって、日本の民主化が企てられ実行に移されて、議会は国権の最高權威とうたわれ、民主日本の名実共に中心になったのであるが、占領軍駐留中は全くその代弁者となり最高の權威は悲しい虚名になり終っていたのである。

昭和二十七年四月二十七日、わが国は漸くにして独立を恢復し、主権者たる国民の手にわが国の政治がかえってきたのであるが、独立恢復後における議会のあり方には、多くの人の失望を招く節々が多い。もともと議会というところは、武器や暴力で戦うところではなく議論によって国事を決するところである。議論と説得の場所であり、最後は算術によって事を決するところである。然るに白昼公然、暴力が横行したり、議会政治を守るべきかどうかについて深刻な議論をしてみたり、戦術的に利用すべき場所としての議会の効用しか考えていない政党もある始末である。また国会は立法院であつて、裁判所でもなく、検事局でもないものであるが、朝から夜まで検事局のように政敵をしぼり上げる新しいマッカーシズムの場となつてみたり、行政府の行動の善の上げ下げにまで干渉するというような行き過ぎを敢てして、はばからないわが国の国会である。

白亜の殿堂と赤いじゅうたんは、かかる国会のあり方に、心ある国民と共に、半ば失望をさえ感じてに違いないであろう。議会政治の危機が叫ばれる所以である。しかし、私は決して失望してはいない。「ローマは一日にして成らず」といわれる。議会は必ず年と共に成長するであらうし、また成長させなければならぬ。

早い話が例の暴力事件にしても、その首謀者たる社会党も国民の厳しい批判に屈しその非を認めざるを得なかつた。疑獄事件を摘発し、それに制裁を加えるということが本来の国会の職能でないにしても、国会のこれに関する論議を通してこの種の事件の概貌が国民に示され、国民の批判と議員の自肅を招来する機縁となつてゐる。パチルスは常に太陽の光熱の下にこれを曝し、これを殺すことによつて社会の衛生はまもられるように、腐敗し易い権力を公開の議論を通して矯正し、内外の重大問題が公明に処理されるわけである。議会の監視を通して日本人の自由と安全が衛られるのである。

国会断想

権力者のなせることが「国民に知らしむべからず寄らしむべし」とする封建政治や独裁政治の下にある国民ほど憐れなものはない。路傍の石まで叫ぶという公明な喧騒の中に、眞実はえぐり出され腐敗は阻止されるのである。国家の運命から個人の生命財産に至るまでが誰かの手によつて朝露のようにあしらわれるのではたまったものではない。議会政治を通してそれが各人の諒解

の下に処理されるわけである。議会政治の効能は、どんなに低く評価してみても最悪の事態をさける効能はもっている。そこに安全と自由と清潔が生き残る唯一の場があるのである。議会は民衆の心を映す鏡であるからである。

はげしい政争は、内乱に代るものという限りにおいて、歓迎すべきものである。反対党は予備的政府であり、「国民の政府」に配する「国民の反対党」である。強力な政権は、強い反対党によつて、腐敗から免れるものである。いい政黨員は自分の上に党を、党の上に国家をおくものであるからである。白亜の殿堂は、沈黙の中に、この議会政治のルールを見守っているのだ。

(昭三〇・一〇)

五 保守と革新

今日の日本には、ある意味において截然と保守と革新の対立相剋が見られる。しかし何れの時代にあつても、現状維持と現状打破の思弁的対立乃至は実践的相剋は、程度の差こそあれ見られたわけで、何もその対立は今日の時代に限つたわけではない。しかしその対立相剋が今日の時代ほどクッキリと浮彫のように露わになつた時代は、日本の歴史を通して珍しいことのようにである。

これを今日の労資関係についてみても、その争点が労資間の交渉や話合によつて完全に妥協が

つくというような性質のものでなく、妥協というのは単なる一時の休戦であつて、本質的な対立関係はちつとも解消されてはいない。その証拠に、特定の企業を廻る内外の経済的条件に見るべき変化がないのに、年中行事のように争議が繰返されているのを見て判ることである。

又本来、経済闘争であるべき労働争議が、その限界をはじめからふみこえて、明白且つ濃厚な政治闘争の色彩をもっていることから見ても、その対立の容易でないことが覗えるわけだ。

わが国の国会における論議を通して、そのことはハッキリしている。国会の真剣なる論議を通して保守と革新が互いに歩みよつて一つの国策を打ち出そうなどということは全く一片の夢であつて、双方共、はじめから相手の提案については、絶対反対の態度が措定されている。国会は話し合いと妥協の場ではなくて、闘争の巷と化してしまつてゐる。この有様では、本来の議会民主主義の実践などということとは到底覚束ない相談であつて、いわば保守と革新は、一階と二階で、虚空に向つて互いにシコを踏んでいる相手なしの相撲のような恰好を呈している。お互いは通約がきく分母をもっていない。又お互いは、違った平面と世界に住んでいる異質人の対立関係にはいりこんでしまつてゐる。唯僅かに多数決の原理なるものが、議会という円周の切点において、かすかす双方の一次的休戦を宣しているに過ぎない状態である。

国 会 断 想

それでは一体このような状態を日本に招致したのは何であるかといつと、私はとりも直さず国

際権力政治の激浪が、深刻に日本の権力政治をゆさぶっているからだといいたい。換言すれば、第二次大戦後における米ソ両国の対立が、そのまま日本に波及し反映しているからだと説明したい。今日における交通通信関係はもとより近代兵器の異常な発達のために、地球が極めて鋭敏な小さいものに集約されてきて、世界の一極の出来事が、その日のうちに世界中に反響を呼ぶような近代の科学時代の登場が、余計にその対立とその波及状態を深刻且つ鋭敏にしている。

もとより今日の保守革新の対立の様相は、独り国際外交関係のみのそれではない。内政関係においても極めて深刻且つ多岐である。しかし私をしていわしむれば、それは国際的外交的対立の伴奏曲に過ぎないのであつて、それらが対立の本曲では決してないというべきだと思ふ。そうだとすれば、今日のこの対立関係の解消というものは、実は日本だけで始末がつくべき性質のものではなく、世界の対立関係のなん等かの形における解消がその大前提になつて見ると見るのが至当であらう。

そうだとすれば、この対立関係の国内的解消を目論むことは、第三勢力論や中立論に見られるように、日本の実力を買いかぶった唯我独尊論であつて、主張者の主観的意図はこれを杜として、実効を伴うものではないといわなければなるまい。それ等の輩の無智と無能に与みしない限りにおいては、われわれは米ソ二大勢力圏のいずれの側に立つかということが残された決断にな

つてくる。それには日本の経済や文化の内在的諸条件を冷静に吟味する必要があり、同時に東西両文化の性質をよく見極めてかかる必要がある。

ところが私の最も悲しい諦観は、実のところ、その両者のいずれかを選択する自由をすら、日本国民は物理的のもっていかないのではないかということである。現実の問題として、日本は、如何に力んでみても、全く自由且つ自主的に両者のいずれかの選択をやりとげることが最早できない物理的制約の中にあるのだ。もし現実の物理的制約を無視してその選択をやり遂げようとすると、日本自体を破滅に陥れる結果を招来することになりかねないように思われる。

だとすると今日の日本における保守と革新の対立は、今日のようなあり方では全く無意味であつて、一片の戯画にしかすぎないとみられよう。いち早く両者は共通の分母を掘り求めて、その上で実効性ある論議を展開することが何よりも肝心である。そしてその共通の分母は何かということ、一応今日の日本の国際政治的立場乃至は国民の物理的な生活条件をそのまま素直に認めたと、その中に一分でも五分でも改善の余地を用心深く、且つ忍耐強く探求するというメンタリテイである。社会党の現実化を希求する声も、保守党の脱皮を要求する論も、本能的に這般の冷厳なる背景をよみとつての提案であることは、そんなに牽強附会の立論であるとはいえない。